

ダイオキシン汚染

チェルノブイリ原発事故でみられるように放射能汚染の恐怖は、その姿が見えない故に恐しさを何倍化していると思う。最近、急に浮上しだしたゴミ清掃工場の焼却炉から出るダイオキシン汚染問題も、猛毒の極微の粒子が見えざる姿で空气中にバラ撒かれ拡散し、降り注いだダイオキシンが食物連鎖で濃縮された食べものから体内にはいり蓄積されるという深刻さに心配がついてくるのである。

ダイオキシンの存在が衝撃的に登場したのは、ベトナム戦争の枯れ葉作戦の後遺症とみられる、ベトナム君の二重胎児の奇形児が報じられてからである。ダイオキシンはごく微量でもDNAを変異させるといわれ、単位がナノグラムやピコグラムという一〇億分の一、一兆分の一などが使われているように、ごく微量でも猛毒で危険なのである。新規のゴミ清掃工場

からの排出基準を空気一立方メートルあたり一〇分の一ナノグラム以下と極端に強化したことでの危険さのほどがわかる。

大量の原材料を輸入して付加価値の高いものを輸出する加工貿易の日本では、差引き勘定でゴミが狭い国土の中に大量に残る。さらに外貨減らしで食料を輸入し飽食の果て捨てるといった具合に、流通システムも含め必然的にゴミ戦争が起るシステムとなっている。そのシステムを変えない限り焼却炉で燃やして減すしかなくダイオキシンがでてしまう。

ゴミ公害の象徴、ダイオキシン問題でゴミ清掃工場と周辺住民との対立が最近とみに深まっていくが、問題はそこに限られたものではない。多数の焼却炉の高い煙突から吹き上げられ、空气中に広く拡散して汚染が広域に及ぶことこそが大きな問題なのである。塩素が入ったある有機化合物を八〇〇℃以下で燃焼させるとダイオキシンが発生するとの報告

があり、ゴミの分別を徹底すれば激減する。

筆者の住んでいる市では可燃、不燃、資源ゴミとプラスチック類の四種類に分別収集しているが、この問題ではリサイクルでゴミの減量に加えて、ダイオキシンがでやすいラップ類など、どの製品が危険なのかを公にして不買にするか不燃物として分別するなど、さらなる必要がある。きめの細かい情報公開とゴミ分別という手間のかかる痛みで負担を分かちあい、いかに多くの人が納得できるかが問題解決の成否の鍵を握っているのではなからうか。

村松 照男

ヒマラヤの雪崩遭難

山歩きを楽しむ人たちにとって、世界の最高峰を眺めてのヒマラヤトレッキングは夢のような山旅である。そのルートは季節はずれの大雪山と雪崩が襲った。チョモランマ（エベレスト）南西のゴキョ峰近くで発生した雪崩に巻き込まれて日本人の中・高年トレッキンググループやシェルパなど日本人が遭難し、カンチエンガ方面でも遭難者をだして、ヒマラヤ登山が一般に開放されて以来の最悪の遭難となった。

この季節のヒマラヤは夏と冬のモンスーンの交代期の乾季にあたり天気は安定し、¹10000²メートル付近でも積雪もなく気温も日中には一〇℃を超してヒマラヤトレッキングに最適の時期といわれている。ところが今年には偏西風の南下が遅れ、ベンガル湾で発生した台風の間、ベンガル湾で発生した台風の仲間であるサイクロンが、例年は早め、東に進路を変えてミャンマー方面に進むはずが西よりに

進んでインド大陸に向かってしまった。

ひまわりの写真や上空³5000⁴メートル付近の⁵500hPa⁶や上空⁷3000⁸メートル付近の⁹700hPa¹⁰天気図で経過を追ってみると、サイクロンの北東側から湿った気流が北上してきたところに、たまたまヒマラヤ果、湿った気流が雨季の頃のようにヒマラヤ山脈に吹きつけ、乾季で好天が続きのあと天候は急激に悪化し、十一月九日から一〇日にかけてこの地方として季節はずれの大雪山や大雪が短時間に降ってしまった。

高層の天気図から推定すると、高度¹¹4000¹²メートル付近が零度で雨と雪の別れ道な¹³って生死をわけた。標高¹⁴13000¹⁵メートル付近の首都カトマンズでは大雨だったが、¹⁶5000¹⁷メートル級以上のトレッキングルートは氷点下数度以内のミゾレ混じりの湿った大雪となった。¹⁸ニユース映像を見ても新雪が¹⁹2²⁰3²¹m²²ところによつては数mも積もっているのがわかる。同時に放映された昨年の同時期の雪のない写真とあまりにも対

照的でいか今年の天候が異常であつたかを物語っていた。湿った雪が急激に積もると、雪はなじまずに新雪の表層雪崩が底雪崩のようにズリ落ちて襲ってくる。夢のヒマラヤの山歩きが、想像外の自然の猛威のなかで暗転してしまったのは悲しみに耐えない。

村松 照男